中国における仏教の伝播経路に関する実態調査

――平成三年度調査報告書――

鎌田茂雄

国際学術研究「中国における仏教の伝播経路に関する実態調査」の平成三年度の調査地域は山西省中南部地区である。

山西省は広大であり、全省にわたって仏教寺院、塔、遺跡、仏教文物が存在するが本調査では、北部地区、五台山地区はこれを除外し主として中南部地区の実態調査を行った。北部地区および五台山地区は別に調査する必要があるからである。

本実態調査では主として太原市の一部、交城県、平遥県、洪洞県、蒲県、隰県、稷山県、開城県、晋城市、高平県、長治県、長子県、沁県などの寺院、塔、寺院址、道観などの調査を実施した。

以下、調査の順序に従って、各県の寺院、石窟、仏教遺蹟、塔などの概略を述べておく。なお重要な寺院、塔などについては、各研究分担者の研究課題にしたがってその調査報告が収録されているので、その報告書を参考にして頂ければ幸いである。

本調査を行うにあたっては、山西省社会科学院歴史研究所研究員、および五台山研究会理事の崔正森先生、ならびに中国社会科学院世界宗教研究所教授、丁明夷先生の全面的な御協力を得ることができた。両先生には山西省南部地区を同行し、碑刻を解読したり、仏教文物の説明をして下さった。また終始同行し通訳にあたった中国国際旅行社、山西省分室の黄玉雄先生など、調査に同行して下さった三

人の先生方に厚く御礼申し上げる次第である。

また山西省における日中共同の学術調査に際してわれわれ調査団を受け入れ、手配して下さった山西省旅游局長韓和平先生に対しても深い感謝を捧げたいと思う。

一　太原市

竜山石窟

太原市西南二〇キロの竜山の頂上にある道教の石窟が竜山石窟である。午前九時二十分に太原市の山西賓館を出発した車は晋祠に行く旧道を南下すること約三十分、右側にある火力発電所を過ぎてしばらく行き、やがて右折し、丘陵に近づく。午前十時、竜山山麓の谷間の一角で車を降りる。これ以上、車が登ることができないからである。

周囲は一面、雑木や野ばらや野いちごでおおわれ、ところどころ巨岩がむきだしており、荒涼たる山塊である。車道から小さな山道に入り、急坂をあえぎながら登ると亭があり、そこから山頂の寺院と竜山石窟が見える。約四十分間登坂すると、頂上に着く。

頂上に最初に見える建物は祠である。すでに道教像は破壊されてしまい、龕の中は香爐があるだけである。洞窟の中央には「保護古迹」と書かれた赤い紙がはってあり、聯には、

上山一次悟道君
各山遊遍万法皆空

と書かれていた。この洞窟の左を登ると寺院がある。たくさんの石を積んだ中に道があり、寺院の小さな門がある。かつては道観であったものが、現在では、僧侶が二、三人住んでいるとのことである。一人の僧が門に現れ合掌してくれた。門の聯には、

身居清山古寺
胸懐十方法界

と書かれていた。門の中をのぞくと、僧房があるだけで大殿は破壊されていた。この険峻な竜山の山頂に住む僧が、生活資材を運ぶのも大へんであろうと思った。

寺院の前を右へ行くと巨岩の上にでる。この巨岩の上に立つと、太原市の郊外の工場群がはるか彼方に遠望できる。この巨岩の崖壁に掘られたのが竜山の道教石窟なのである。

巨岩を右側の坂から下ると、先ず目につく二つの石窟がある。第一窟は七真龕である。この洞窟に入ると、「玄門列祖洞」と朱書されており、この洞が道教の七真人を祀ったものであることがわかる。ちなみに北派の七真人とは邱長春、馬丹陽、劉長生、譚長真、郝廣寧、王玉陽等の六真人と孫不二仙姑である。

これらの真人像の頭部は破壊されているが、七真の像があり、壁には元代の題記が書かれている。天井を見ると、竜鳳の図案の一部が見える。

第二洞は三大法師龕と呼ばれるもので、この竜山石窟を開いた三大法師である宋徳芳、李志全、舜澤の三人の像がある。主尊は宋徳芳（披雲）の像であり、右側には李志全像、左側には、舜澤像がある。「披雲」「李志全」「舜澤」などの文字が壁に書かれた題記の中に見える。その文字は元代に書かれたもので雄渾な筆勢である。創建者、宋徳芳を中心として、二人の弟子がその左右に侍っており、さらに左側の隅には一人の供養人の像があった。

第三窟は玄真龕である。小さな洞であり、中には頭部を破壊された三像があった。巨岩の中腹にあるこの洞から下におりると、他の洞窟が見える。

第四窟は小さな龕であるが、辨道龕であろうか。全真道士が坐禅瞑想する龕であり、最初に見た洞も、辨道龕の一つであるかも知れない。すると、竜門石窟には辨道龕が二洞あることになる。

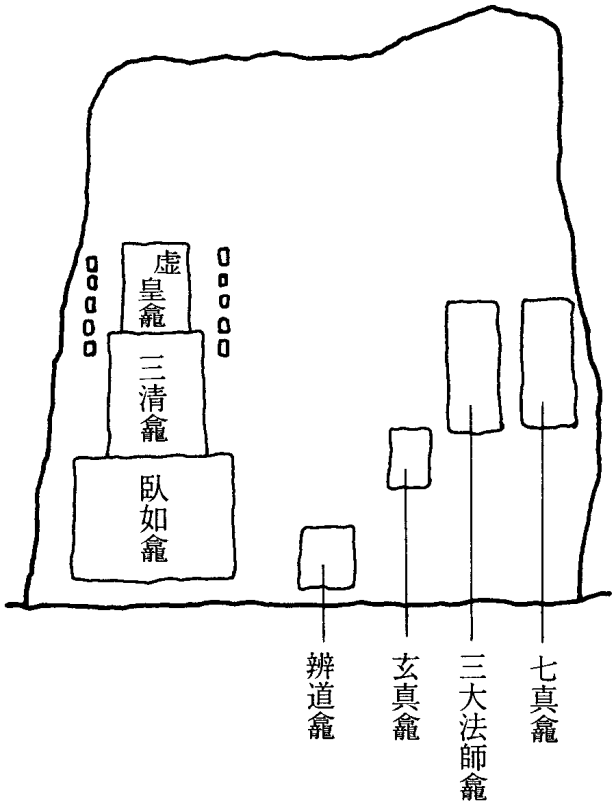
第五窟、第六窟、第七窟は、重層的に重なっており、三層よりなる石窟である。下層が第五窟で臥如龕と呼ばれている。それは開山祖師の宋徳芳の涅槃像があり、頭部を向って右側にして臥せっている像であり、仏教でいえば寝釈迦像である。

中層は三清龕と呼ばれ、宋徳芳の門人の李志全、秦志安、舜澤の三真人が祀られている。この真人たちの像は色彩もかなり残っており、華やかな情緒をかもしだしている。この三清のまわりには大小六像がある。

最上層は虚皇龕と呼ばれる小さな窟である。三清龕の天井に穴があいており、そこから登ることができるが、梯子がなければ登ることができない。幸いに僧が梯子を持って

きてくれたために登ることができた。

なお竜山石窟の各窟の分布状況を図示すると、つぎのようになる。



道教窟の前で、同行した中国社会科学院世界宗教研究所の丁明夷先生は、石窟芸術の専門学者であるが、この竜山石窟へ来たのは二〇年前であったと感慨無量に話しておられた。

この竜山道教窟は元の全真教の道士である宋徳芳が、太宗の六年（一二三四）に造営したものである。宋徳芳は道教石窟および昊天観を造った。

中国に現存する道教石窟は、この竜山石窟と山東省の斉州のものしかないといわれるので、たとえかなり破壊されているとはいえ、この竜山石窟は、道教の石窟芸術の研究と、道教史研究の上においても極めて重要なものといえよう。

二　交城県

卦山天寧寺

太原を出発し、太汾公路を西南に行くこと五六キロで卦山の山麓に着く。公路を右へ曲がるとすぐに山峰に屹立している華厳塔が目に入る。荒涼たる連山の山谷に柏林が繁茂している中にあるのが天寧寺である。

卦山は万卦山とも呼ばれるが、それは昔から「山形卦象」であるためであり、「卦岳爻峰」ともいわれている。この卦山には、天寧寺、石仏堂、朱公祠、聖母廟、卦山書院、文昌宮などの建物があるほか、僧房、華厳塔、墓塔林、環

翠亭などがある。このなかでもっとも古い建物は石仏堂であり、唐の貞観元年（六二七）に創建、元の泰定元年（一三二四）、明の永楽七年（一四〇九）重修、成化十二年（一四七六）重建、一九八五年ふたたび再建された。なかでも正殿である宝燈王仏殿の中には唐代に彫刻された高さ三メートルの丸彫りの石仏があり、今もなおわれわれの目にふれることができる。

天寧寺は卦山最大の建造物であり、天寧万寿禅寺ともいわれた。創建は唐の貞観元年（六二七）、唐宋時代には、華厳宗叢林として栄えたが、金代には禅宗寺院にかわった。

柏林のあいだの坂を登ると、石の牌坊がある。この牌坊には「登彼岸」の扁額がある。ここから六十六段の階段を上がると山門に着く。山門には「第一山」「万寿禅寺」などの扁額がある。この「第一山」は北宋の有名な書家、米芾が書いたものである。山門の左右には密迹金剛が立っている。

石牌門の右側にこのあたりの寺院の県級重点文物となっているものが書き並べてあった。それは一九八二年九月に認可された永福寺、呂祖閣、石仏寺石刻、奎星楼、石銷観、孤氏墓群、円明寺、弥陀寺、三座崖遺址などであった。

山門を入ると、「重修卦山天寧寺碑記」「唐華厳九会之碑」「華厳三会普光明殿功徳碑」などがある。「華厳九会之碑」は貞元十二年（七九六）後者は貞元十六年に立てられたものである。「華厳九会之碑」には「克誠」という人名があり、「華厳道場」という字を読みとることができた。また「華厳三会普光明殿功徳碑」には天寧寺の「功徳」と、寺の拡大の事跡が記され、その主持者は道融禅師であることが明らかにされていた。道融は、俗姓元氏、陝西省鳳翔の人で、碑文の中に「心学竜樹、徳辺天親」と書かれていた。彼は『華厳経』の経文を一句一拝しつつ、精神を統一し禅定し、身心全く動揺することがなかったという。道融を中心とする華厳道場については別に研究する必要があり、従来の華厳宗史に新しい頁を加えることになる。

そのほか現存する碑刻の中で重要なものは、「明鋳成鉄仏之記鉄碑」（明鉄碑）、「明重修万卦宝灯王仏殿碑記」「朱彝尊与卦山題名碑」、「清重修天寧寺及卦山書院碑記」など多くの碑刻がある。

明の正徳四年（一五〇九）に創建された千仏閣には、

「仏教立宗」「卦岳爻峰」「毘霊閣」などと書かれた扁額があり、その前に「移祀関聖帝君碑記」があった。この千仏閣にはかつては両側の木龕に千仏があったが、一九六五に破壊されたといわれる。

正面の基壇の上に立っているのが大雄宝殿である。柱には青獅子、白象などが彫られている。殿内には三身仏、すなわち中央に毘盧遮那仏（法身）、右に釈迦牟尼仏（応身）、左に盧遮那仏（報身）が祀られていた。毘盧遮那仏の両側には脇侍の二菩薩が立っている。この三仏は明の永楽五年（一四〇七）に造られたものといわれる。

大雄宝殿の東西の両側に、関帝殿と観音殿がある。それぞれ清の乾隆年間の建造といわれる。もとは関帝、周倉、関平、観音像などがあったがすでに壊されてしまった。

つぎに両側の配殿として羅漢殿と菩薩殿とがある。明の成化十一年（一四七五）に立てられた羅漢殿には十八羅漢の塑像が、明の景泰五年（一四五四）に再建された菩薩殿には、もとは文殊、普賢、観音、地蔵の四大菩薩像があったという。

後院にあたる毘盧閣からは、寺院全体を俯瞰できる。内部は文革中に破壊されたが、第一層に一九八二年、明代の大型仏龕と毘盧遮那、盧遮那、釈迦の三尊の木彫仏像をこの中に安置した。この毘盧閣は清の康熙四十七年（一七〇八）に重建されたものである。上層には「毘盧閣」の扁額が、中層には「卦岳爻峰」の扁額がかけられている。

後院の背後には普光明殿の遺址がある。唐の貞元十六年（八〇〇）に立てられた普光明殿は、明代以前にすでに泥石をかぶり破壊されていたが、清の嘉慶初年と一九八三年に遺址の中から唐代の碑刻が出土した。遺址の上にあった唐代の華厳経塔二基は文革の時に破壊され、現在、基壇の一部が残存している。華厳経塔は卦山全体では六基あった。山頂の端に三基、寺の背面に三基あった。華厳経塔は八角形の石塔で、その形式は経幢形式であり、陀羅尼経幢と似たものといわれる。二層乃至三層からなり、基台は正方形であった。第一層の塔身は比較的高く、その表面には紋様、門窓、仏像、金剛力士などが刻されている。塔柱、塔頂の部分もまた八角形である。第二層の塔身は短く、経文と建塔の銘文が刻されていた。

現在、石仏堂に登る急坂の麓に放置されている華厳石塔

の一部は塔の第一層と思われ、門窓と守門の金剛力士が刻されており、さらに各面に「普光」「厳塔」「厳場」の文字が刻されているのが見える。華厳石塔の全体を見ることができないのは、華厳宗史の研究者としてまことに残念なことである。

急坂の階段をあえぎながら登ると石仏堂の入口に着く。「石仏堂」の扁額のある山門を入ると、照壁のようなものがあり、そこには「華厳宗」と大きく書かれた扁額があり、この天寧寺が華厳宗の寺院であったことが明らかにされている。

石仏堂は卦山の中でもっとも古く創建されたもので、唐の貞観元年（六二七）の創建といわれる。この堂内には丸彫りの石仏があり、唐代の燃燈仏といわれる。この石仏堂の前には「重金宝灯円満記」「萬卦山三十三天建玄武塔記」の碑刻があった。

石仏堂の前に大きな屈曲した柏が生えているが、この柏は蛇頭柏と呼ばれ、その三つに分かれた幹の上に観音龕がのせられている。この龕には「大慈大悲」と書かれていた。観音を祀ってある仏龕である。

この石仏堂の前から遙か彼方の卦山の山端に屹立しているのが華厳塔である。これは卦山のシンボルでもある。

ふたたび坂を下りて右の方へ行くと、三教堂がある。すでに倉庫となっており、荒れ果てている。山門のところから左の山道を登って行くと山腹に塔林がある。最初に見た墓塔の一つには「裕公禅師霊塔」と刻されていた。他の一つには「明正徳九年四月八日、第四十二代益公大千萬卦山大千上人塔誌」とあった。さらに奥に進むと、多くの墓塔が林立し、なかには破壊されて基台だけが残っているのもある。

一番古い墓塔は「第二十代竹軒偉公禅師寿塔」と書かれた塔であることを丁明夷教授より御教示を受けた。そのほか「第三十二代空從禅師」「琳公首座霊塔」「第二十九代住持無瑕観禅師寿塔」など歴代住持の墓塔がある。

参考文献

解光啓『卦山』（山西人民出版社、一九九〇年八月）

三　平遙県

双林寺

双林寺は平遙城の西南十二里（中国の里）の橋頭村にある。漢の時代、この地方には中都県が設けられていたのでもとの名は中都寺であったが、また近くに冀壁堡があったために冀壁寺とも呼ばれた。

双林寺が始めて立てられた年代は不明である。寺の中にある北宋の大中祥符四年（一〇一一）に建てられた「姑姑碑」の記すところによると「中都寺は北斉の武平二年（五七一）に重修されたとあるので、その創建年代は北魏の早期と思われる。この寺は歴代にわたって再建されたが、現在の建物はほとんど元明の建築である。碑文によると、もとの寺は、規模広大であり、中都県の河の水が殿をうるおし、その紫閣は中都の西を威圧しており、北斉の皇帝はこの寺に対して中都寺の牌額を下賜した。後にしばしば兵火によって焼失し、ただ碑記や銘碣のみが残っているだけである。

宋の時代に尼僧がこの寺を一新させた。宋以後は中都寺を改めて双林寺と称ばれた。双林というのは釈迦が入滅するとき、沙羅双樹の間で没したので、その双樹から名づけて双林といったのである。

双林寺は宋代以後、何百年にわたって、兵火にあって灰滅したため、ついに尼僧が僧の住居に避難した。その寺の前後にわたって堡壘を建てて賊を防ぎ、廃墟を修復したのである。

現存している清の碑と、一部の銘文や記録を考えてみると、明の景泰、天順、弘治、正徳、嘉靖、万暦年間および清の道光、宣統年間にしばしば屋根が修理され、塑像が新しく造られたりした。

寺院は南向きに建てられ、三メートル高い土台の上に建造されており、寺のまわりは、突きかためた土の塀で囲まれ、南の塀にはアーチ型の山門がある。寺の規模はよく整えられ、二つの道に分けられており、西側には廟院、東側には経房、禅院、僧舎などがある。南北の長さは一二三・七メートル、東西の幅は五〇・六メートルある。

双林寺には現在大小十の建物があり、その前後には三つの中庭がある。山門を除き中心線には天王殿、釈迦殿、大

雄宝殿、娘娘（ニャンニャン）殿が並んでいる。前院には羅漢殿と閻魔殿の二つがあり、二つ殿の南のはしの塀をへだてて武聖殿と土地殿が建てられている。釈迦殿の両側には鐘楼と鼓楼とが対峙している。中院は千仏殿と菩薩殿が左右に相い対し、南殿と共に殿内には彩色塑像がいっぱいある。大きいのは一丈余り、小さいのは一尺ばかり、全部で二〇五二体ある。院内には古い唐代の槐（えんじゅ）が聳えており、寺院の建物とてり映えて見ごとな景観を呈している。

天王殿のまわりの軒の下には四大金剛神の塑像があり、中には四天王と八大菩薩がある。金剛杵をもった護法神と四天王は威風堂々とした風格をもち、すべて元代に造られたものである。天王殿の屋根の真ん中にある琉璃宝頂には、明の弘治十二年（一四九九）八月二十六日に書かれた題記がある。

釈迦殿はこの寺の中心である。釈迦殿の中には仏や脇侍菩薩や、釈迦の降誕と入滅の故事を造像化した四十八の塑像がある。この塑像には文臣や武将、亭台や楼閣などが目を見はるばかりに美しく造られている。

釈迦殿の中の主尊は釈迦仏であり、左右には文殊と普賢の二菩薩がある。この主壇の裏側には、蓮の上に乗った観音像がある。本殿の両側の壁面には先に述べた釈迦の一代記が彫られているのである。天井を見ると十大明王が造られている。

釈迦殿のこれらの塑像群は、陝西省の藍田県にある水陸庵の塑像とよく似ており、まさしく塑像の殿堂ともいわれるべきものである。

大雄宝殿には三世仏、二弟子、二金剛および脇侍菩薩がある。文献の記載によれば、この殿はもともと七重の楼閣であり、その高さが望まれたが、火事で焼かれ、明の景泰年間（一四五〇－五六）に重修されたものである。この殿が七重の楼閣であったことは、もとの柱の礎石によっても証明できる。塑像の三世仏と壁画の礼仏図は明代のものであり、清代に色なおしが行われている。

羅漢殿には観音と十八羅漢がある。とくに十八羅漢の造形は生き生きとしており、その形態は自然のままであり、衣紋も洗練されている。考えてみると、これらの羅漢は宋代の風格をそなえ、この双林寺中のすべての彩塑の中の絶品といえるものである。

この殿の十八羅漢はすべて観音菩薩の方に顔をむけている。これは観音菩薩に拝礼している姿勢をあらわしたものである。中国の羅漢の造像を考えると、唐代までは十六羅漢であったが、宋代以後になると十八羅漢となり、現代の中国の寺院ではほとんど十八羅漢を祀っている。

十八羅漢の塑像ですばらしいのは、第一は山東省の長清県の霊岩寺であり、第二はこの双林寺のものであり、第三は山西省の長子県法興寺のものであるということを同行した丁明夷教授より御教示を受けた。

閻王殿には地蔵菩薩と十殿閻君と地獄の判官が祀られている。天、人、阿修羅、地獄、鬼、畜生の六道輪廻（りんね）の図が、この殿の中に塑像として造られているのである。背景の風景はきびしく荒涼としている。この閻王殿のそばには冥王殿と土地殿がある。冥王殿には閻魔大王がおり、冥界を司っている。また土地殿には土地公がまつられ、その両側には金童と玉女の塑像が立っている。

千仏殿と菩薩殿の千手観音や、殿内にある供養人や五百余体の菩薩像など、塑像はほんもののように生き生きとし、立像もあれば坐像もあり、それぞれ形は異なっているが、すべて明代に造られたものである。

武聖殿の中には関帝についてのさまざまな物語が塑像として造られ、天井からつるされているが、その塑像は殿内に入る人々の目に見事にうつるようになっている。

双林寺の色彩のある塑像は、中国の雕塑芸術上、有名なものであり、芸術家たちは、この塑像こそ宋、元、明、清の歴代の彩塑芸術の宝庫であるとほめたたえている。また一九七九年、この双林寺を内外の人々に開放して以来、世界各国の専門家や観光客がこの寺を訪れ、すばらしい彩塑芸術に感嘆の声を放っている。

鎮国寺

鎮国寺は平遥県城の東北一五キロに位置する郝洞村の南北を、同蒲鉄道に沿って北から行くとみえる。

鎮国寺の原名は京城寺であり、明の嘉靖十九年（一五四〇）に鎮国寺と改められた。

前院と後院とが真直ぐに連なり、前院は寺院の西側にあり、総面積は一〇八九二平方メートルである。寺院の中心線の上に天王殿、万仏殿、三佛楼がつらなり、前院の東西

には鐘楼、鼓楼、三霊殿、財福神、二郎殿、土地殿などがあり、後院には羅漢殿、閻王殿などがある。

天王殿は元代に建てられたもので、屋根は入母屋式であり、殿内には四体の四天王の塑像がある。鐘楼の上には金の皇統五年（一一四五）に造られた鉄鐘一口があるが、その形は古く雅やかであり、すぐれた工芸が施されており、平遙県内の珍品である。鎮国寺の中でも万仏殿はもっとも古く、五代の時の北漢の天会七年三月建造という題記が、大殿の軒の下に書かれている。

この建物の幅は十一・五七メートル、奥行きは一〇・七七メートルあり、建物は古く、その構造も珍らしく、歴史の古い、中国でも数少ない五代の古い建築である。金、明、清代に修理されたがなお古い形を残している。

大殿の中の中央には、仏壇があり、その幅と奥行きは六・五九メートルある。まん中には須弥座が造られ、その上に釈迦の坐像と阿難と迦葉（しょう）の二人の弟子、さらに二体の菩薩、二体の供養菩薩、二体の供養童子、二体の天王などが立っており、これは五台山の南禅寺の大殿における仏像の配置とほぼ同じである。仏像の肢態の線は円満であり、ほおは豊かで丸みがあり、唐代の風格をよくあらわしている。

鎮国寺の寺内にある碑文から、元明時代に隙地を利用して建物を建てたことがわかる。山門と天王殿と鐘楼と鼓楼が先に建てられ、その後で三仏楼と東西の廻廊と観音殿と地蔵殿が建てられたのである。清の雍正と乾隆年間に、東西の廻廊が修理された。

鎮国寺でもっとも古い建築物は万仏殿である。中国最古の木造建築は五台山南禅寺であり、つぎが五台山仏光寺であり、この万仏殿は第三の建物である。

清虚観

清虚観は太平崇聖宮と呼ばれたが、唐の顕慶五年（六六〇）に創建されて、宋の治平元年（一〇六四）、太平観の名称が清虚観に改められた。清虚観は城内の東大街路の北に、南に向かって位置している。

代々あまり変化はなかったが、しばしば修理が行われたが、その面積は一七一二平方メートルある。前後三つの建物の配置からなっているが、その中心線上には、牌楼、過殿、竜虎殿、純陽宮、三清殿、玉皇閣がある。院内にある

牌楼を見ると、二本の柱が立っており、八字形に柱がおだやかに組み合わさっており、上には清の乾隆三十六年に「清虚仙迹」と書かれた扁額がかざられている。過殿は幅が五間、奥行きには三つの柱がありその間には通り道があけられている。この建物は清代のものである。

竜虎殿は幅は五間、建築上、大へん珍しい構造をしており、元代に建てられたものである。

竜虎殿の正面にある東西の壁には青竜と白虎の塑像がある。その姿は大きく、目は怒り、手にはほこをもち、その姿は人を見下しているが、明代にできたものである。

三清殿は中院の北側に建てられている。幅は五間、奥行きには十一本の垂木がある。その構造は珍しく、殿宇も高大であり、殿内にある三清像はすでになく、元代に建てられた時の蒙古文の碑があるだけである。三清殿の両側には三間の側殿が建てられている。三清殿の前の高い台基の上には献殿がある。

楼閣の上には呂洞賓の泥塑があり、それは純陽宮ともいわれ、清の光緒年間に建てられたものである。

中院の東西には十一間の配殿があり、殿の中の小道には小碑房があり、後院の北にはもとは玉皇閣があったが、今は三つの窟洞があるだけである。

清虚観の現存する建築と、いくつかの彩塑以外にも、唐、宋、金、元、明、清の各時代の大小二十余り碑碣が残っている。

四　洪洞県

広勝寺

山西省洪洞県城東北約十八キロの霍山の南麓に位置する。それは霍山の霍泉の源泉のあるところである。この霍山には古柏がうっそうとそびえ、山麓には泉水が湧き出て、山紫水明の地である。この美しい自然の中に有名な古寺である広勝寺がある。その広勝寺の建物、琉璃瓦、彫刻、壁画はとくに勝れたものとして有名である。寺の中には遠方からもよく見える飛虹塔が高く聳えたっている。この飛虹塔こそ広勝寺のシンボルでもある。

広勝寺は元・明時代に建てられたものであるが、その寺域は上寺と下寺と水神廟の三つに分かれており、上寺は山の上に、下寺は山の麓に、水神廟は下寺の西側にあり、そ

れぞれ北から南に面して建てられている。上寺の主な建物には飛虹塔、弥陀殿、大雄宝殿、毘盧殿、観音殿、地蔵殿、配殿などがある。下寺には山門、弥陀殿、大雄宝殿、西垛殿があり、水神廟のなかの中心の建物は明応王殿である。建築物以外にも、広勝寺には壁画や、木雕や、泥塑などの文物がある。有名な元代の演劇を画いた壁画は、水神廟の明応王殿にある。四十数年前、広勝寺の中から、金代に雕造された大蔵経である趙城蔵、数千巻が発見された。これらの経典は八百年以上たったものであり、印刷史や学術研究上からみても重要な価値があるため、経典は現在、北京図書館に保存されており、広勝寺にはない。

広勝寺は悠久の歴史をもっている。『平陽府志』によれば、寺は後漢の桓帝の建和元年（一四七）に創建され、始めは育王塔院と呼ばれたが、唐代に広勝寺と改められた。唐代の代宗の大暦四年（七六九）、中書令、汾陽王の郭子儀が公文書を書いて再建することを上奏した。宋金時代、広勝寺は戦火によって焼きはらわれたが、そのたびに再建された。元の成宗の大徳七年（一三〇三）、平陽一帯に大地震が発生し、洪洞県と趙城県は地震の中心地となり、広勝寺と水神廟は全部崩壊した。その後、大徳九年（一三〇五）の秋にふたたび再建された。以後、明の嘉靖三十四年（一五五五）と清の康熙三十四年（一六九五）、平陽一帯に二度にわたってやや強烈な地震があったが、元代に再建された広勝寺は比較的完全な形で残ったのである。上寺の飛虹塔と大雄宝殿など、明代に再建された建物以外、上寺のその他の建造物、および下寺の建物や水神廟の建物などは、大部分、元代の構造をそのまま現在に残しているのである。

霍泉の水源から約五百メートル山を登って行くと、上広勝寺に着く。山道は舗装されて、車で登ることができる。山道から下を見ると化学工場が見える。山頂に着くと、観光客のための店がでている。ようやく霧が晴れて、広勝寺のシンボルである飛虹塔が見えてきた。

山門を入るとあまり大きくない中庭があり、その正面の北に面した階段の上に垂花門が建てられている。門の中には、一段と高くなった中庭があり、その周りは煉瓦の垣根で囲まれているが、そこが上寺の塔院があるところである。塔院の中心には雄壮な眺めの飛虹塔が聳え立っている。塔の北側には弥陀殿があり、その両側には側門があり、その

門の中には広々した中庭があり、正面には大雄宝殿、東西には配殿と回廊が対照的に配置されている。一番奥の中庭の正面にあるのが毘盧殿であり、その両側に観音殿と地蔵殿がある。それぞれの殿のあいだは、すべて煉瓦敷の道で通じあっている。中庭を進んで、上寺全体が構成されている配置をみると、それらは元・明代の再建されたり補修されたりしているが、今なお唐宋時代の固有の形式を保っているのである。

飛虹塔の表面にはすべて七色の琉璃瓦がはめこまれているために琉璃塔とも呼ばれる。塔は八角形で十三層あり、高さは四十七メートルある。外形の輪廓は下から上に向かって次第に小さくなっているのでその形は錐のようである。塔身は煉瓦造りで、外側には黄色、緑色、藍色の三色の琉璃瓦からできた屋根があり、そこには神龕、斗拱、蓮辨、角柱、勾欄、花罩、と盤竜、人物、鳥獣や各種の花や草の模様がついており、塔身の飾りは多彩で絢爛として輝いている。塔の基層には回廊が設けられ、その回廊の南側の入口には、二階建の亀須座がとびだしている。塔身の第三層には一周りの平座がおかれ、その上には琉璃焼の仏、菩薩、弟子および金剛像などが置かれている。第四層から第十層の間には、それぞれ煉瓦造りの巻龕、門洞と倣心、門の外の両側には琉璃焼の盤竜、宝珠および花飾りなどがある。塔の基層の中に入ると、釈迦の銅像があり、銅像の上部には琉璃焼の天井があり、勾欄、楼閣、盤竜、人物などを飾りつけている。入口の参道右側の壁の上に一つの碑石がはめこまれており、上面には塔の再建年代がきざみこまれている。それによると、明の武宗の正徳十年（一五一五）に再建が始まり、世宗の嘉靖六年（一五二七）に完成したことがわかる。この基層の内部は真暗闇であるが、懐中電灯で照らすと、銅製の仏像が重々しい姿を見せてくれる。なお天井を見ると、あざやかな模様が光りの中に浮かびあがって見える。それはすばらしい芸術作品である。天井の模様は細かくきらびやかであるが、普通は暗闇の中に沈んでいる。懐中電灯で照らした時のすばらしさは筆舌に尽くしがたいものがある。

弥陀殿は前殿とも呼ばれ幅は五間、奥行きは四間あり、屋根は入母屋造りである。前後の軒には明かり取りの門があけられているが、四つの壁には窓がない。弥陀殿のなか

の真中の像は明代に鋳造された銅製の阿弥陀仏である。その両側には元代の泥塑の観世音菩薩と大勢至菩薩がある。主尊の前に銅製の釈迦仏が置かれているが、これは別の場所から持ってきてここに安置したもので本来、弥陀殿にあったものではない。弥陀殿の中の両側には、木製の経棚があり、この中に趙城蔵と呼ばれる大蔵経が保存されていたのである。この中に収蔵されていた趙城蔵は約五千冊あったが、一九四五年に北京に移されたので、現在は経棚だけが残されているにすぎない。なお、この弥陀殿の中も明代の壁画が描かれており、かつては壁画の殿堂でもあったのである。

大雄宝殿の前の扁額には清の雍世帝が書いた「光輝万古」という字が書かれており、右の方には鐘があり、左の方には石碑が並べられていた。二つの聯の左側のそれには「心即仏、仏即心」などの字が見えた。

大雄宝殿は中殿ともいわれ、明の景泰三年（一四五二）に重修されたものである。殿内には仏龕が設けられ、三体の大雕像が飾られている。その中心は釈迦仏であり、西側は文殊と普賢菩薩である。それぞれの像は、ほどよく整っており、その姿も泰然自若としている。硬木でできた仏龕の前には、盤竜、飛禽、走獣、花卉、仙人、巻雲などの図案がいっぱいに彫られ、その雕刻は非常に精緻である。仏龕の両側とその背後には清代に鋳造された観音と十八羅漢像などがある。

大雄宝殿の西側の垛殿は形はやや小さいが、その中に韋陀像を祀っているので韋陀殿ともいわれる。殿内の東壁には天神、長老などの図像がいっぱいに描かれ、図像の構図は手堅いながらも、筆力は流暢であり、一幅のすぐれた明代の壁画である。

毘盧殿は後殿であり、天中天殿ともいわれる。ちなみにこの毘盧殿の前の扁額には「天中天」と書かれている。幅は五間、奥行きは四間で、現在の建物は明の弘治十年（一四九七）に重修されたものである。殿の前には月台がある。殿の内壁には窓がなく、描かれた壁画と安置された神龕に対して十分に場所が提供されている。殿の頂上の五つの部分には、屋根の獣、屋根の刹輪、軒には曲がった滴水（水うけ）などがあり、それらは、すべて黄、緑、藍の三色の琉瑠でできている。毘盧殿の中に三尊の仏像があり、その

仏像の背後には背光が造られている。三尊の仏像の前には、観音、文殊、普賢、地蔵の四体の菩薩像があり、それらは土で造られた塑像である。殿の周りには、木彫りの龕が三五あり、それぞれの龕の中には鉄仏が一つずつ置かれている。龕の上部の垣根の上には、五十三仏の壁画が描かれ、後壁の垣根の上には釈迦像と十二縁覚菩薩とが描かれていた。画中の人物の形は円満であり、その姿態は自然であり、着ている衣粧ははなやかである。これらの画は明の正徳八年（一五一三）、この地の絵師の楊懐らが描いたものといわれる。大殿前面の軒の扉の上に、花狭間（はなはざま）があるが、そこには六種の円形が互いに交わった窓れんじの図案がある。その形は宋代に造られた型のなかの「桃白毬紋格眼」に近似しており、その工芸は精緻を究めたものである。これらのものはほとんど明代に造られたもので、小型木材工芸の傑作といわれる。

下広勝寺は霍山の麓にある。寺は霍泉の源流の北側にあり、山を背にして水流をわきにし、北から南に向かって建っている。その地勢は南側が低く北側が高いので、寺はその地勢にそって建造されている。前から後へゆくほど、高くなっており、主な建物は中心線の上に配列されている。霍泉の源流はきれいな泉の湧いた池となっており、その周囲には観光客用の売店があり、遊び場が作られていた。この霍泉のすぐ左側に下広勝寺の山門がある。

山門はまた天王殿ともいわれる。幅は三間、奥行きは二間で、殿内には、もとは四天王の塑像があったが今はない。この天王殿の建造年代を記した題記がないので、資料によって判断はできないが、その形や構造などから判断すると、この天王殿は元代に立てられたものと思われる。

山門を入り、高い階段を登り、坂道に沿って上がって行くとやがて弥陀殿に着く。弥陀殿は前殿にあたり、幅五間、奥行き三間で、明の成化八年（一四七二）に再修されたものであるが、基本的には元代の形を保持し、まれにみる珍しい構造であるといわれる。前殿の両側には清の乾隆十一年（一七四六）に建て増しされた鐘楼と鼓楼とがある。

元の一三〇三年、この地方に大地震があったために大雄宝殿は倒壊した。そのため現在の大雄宝殿は、元の武宗の至大二年（一三〇九）に建てられたものである。前面の軒には扇門が、あいだをあけて設けられ、その上部に格子窓

がつけられている。

大雄殿の中には主像としては三身仏がある。三身仏の中央は毘盧仏、東は盧遮那仏、西は釈迦仏である。毘盧仏の前には脇侍菩薩が立つ。三仏の両側には文殊と普賢菩薩が、それぞれ獅子と象の上に乗っている。この塑像の肌は豊潤で勇健であり、衣は自然に垂れ下がっている。塑像の光沢は古いが特別なおもむきがある。

大雄宝殿の四面の壁には、もともとは壁画がいっぱいに画かれていたが、その内容は、仏、菩薩と善財童子の五十三参などである。現在残っている小さな画面の一部を見ると、その絵は精美であり、その色彩は豊富であり、まさしくこれは、大雄宝殿が建てられた時の作品であることがわかる。惜しむらくは一九二九年、この壁画は剝奪されて外国に売られてしまったために、その全体が破壊されるに至ったのである。

水神廟は下広勝寺の西側にあり、下広勝寺とは垣根一つで隔てられ、側門から入ることができる。水神廟は中庭で前後二つの建物に分けられ、明応王殿以外の建物は、すべて近代に再建されたものである。

明応王殿は水神廟の後院の北隅にあり、元の仁宗の延祐六年（一三一九）に建てられたものである。明応王殿の幅と奥行きはそれぞれ五間あり、屋根は二重の軒がある入母屋式で、一間の幅の回廊によって四周が囲まれ、明応王殿自身は三間すぎない。

前の軒には明かり取りの板門が開かれ、四壁には窓がないが、壁画を描くのには便利になっている。殿内には神龕が一つあり、その龕の中には水神明王の坐像と、侍者が彫られており、龕の前の両側には四体の像が立っている。門の外の廊下にも二つの塑像がある。これらの塑像の服飾からみると、宗教的な神聖化された偶像の範囲を逸脱しており、きわめて生活的なおもむきがみられる。

殿内の四壁には合計一九七平方メートルにわたって壁画が描かれている。それは元の泰定元年（一三二四）に描かれたものである。東西の壁には祈雨降雨図が、北壁には明応王の王宮にある尚食尚宝図がかかれており、南壁の西半分の部分には、霍泉玉淵亭図があり、東半分には有名な元代の演劇の壁画がある。この壁画から、われわれは宮廷のぜいたくな生活や、民間の漁師が魚を売っている情景をみ

ることができる。東壁の上部には、元代に再修された以前の上広勝寺の図が書かれている。なかでも南壁の演劇壁画がもっとも重要なもので、それは中国の演劇芸術史上、重要な地位を占めるものである。画面には十人の演出家が描かれ、一名の舞台に上がっている女の俳優が幕をあけているのが画かれている。元代の中期は中国の雑戯が盛んな時で、とくにこの平陽一帯の地域は、演技発生の地の一つでもある。明応王殿のこの壁画こそ、まさしくこの当時の盛んな演劇活動を反映したものである。

水神廟の前面の東の隅に、南北の幅約四十メートル、東西の長さ約二十五メートルの池がある。当時の人々は普通「海場」と呼んだが、これこそが霍泉の源流である。霍泉の水は山麓の岩磐から涌き出た水を集めて潭をなしたものである。碧潭の水は清らかで底が見え、浮き草は四季にわたっていつも青々としている。ここから見ると、古柏は翠緑に茂り、古い名刹が聳えたち、赤い垣根と緑の瓦の色どりが人の目を奪う。この地こそ広勝寺を参観したあとの憩いの場所なのである。

五　蒲県

東岳廟

山西省蒲県城東二キロ柏山の頂上にある。全山、松柏におおわれているため柏山といわれるが、その頂上にあるので柏山廟とも呼ばれる。

東岳廟の歴史は古く、蒲県誌の記載によると、唐の貞観以来、しばしば修復が加えられたといわれる。元の至正二十一年（一三六一）の碑記には、つぎのように書かれている。

斯宮之築旧矣、碑文剝落、無以考其興建所自。

碑文が剝落しているために、興建年代を推定することはできないという。ただ廟内の献亭の柱礎に「金泰和六年五月」と彫刻されているので、現在の建築は七百八十年余りの歴史を有していることがわかる。

元の大徳七年（一三〇三）の地震によって瓦礫と化し、その再建のために四十年余りを費やし、元の延祐五年（一三一八）、大殿、献亭、東西の回廊、十王府、寝宮、禅院などの主要な建造物が再建され、さらに至正二十年（一三

六〇）すべての工事が完成した。その後、明清時代に修理が繰りかえされた。

全廟の敷地は面積八千九百平方メートル余りあり、建物の面積は七千平方メートル余りある。

御馬亭のある坂を登って行くと、やがて二頭の鉄獅子のある鐘鼓楼に着く。すぐに天王殿とその上に凌霄殿がある。天王殿を通ると東岳行宮大殿のある中央の建築群を見ることができる。一番前には二本の古秋という大樹がある。この木は木王ともいわれる。看亭を通ると金水橋という石橋があり、それを渡ると献亭がある。献亭は東岳大帝に祭品を供献するところである。その前にある大きな大殿が行宮大殿である。この行宮大殿の柱礎に先に述べた金代の刻文がある。行宮の扁額には「神恩広被」と書かれていた。殿内の中央には東岳大帝黄飛虎の坐像があり、左右には侍者が配されていた。

行宮の前や側面、背後にはたくさんの碑刻が立っている。その一つに「重修東嶽廟碑銘」があり、それには元代の地震で破壊されたこと、さらに重修の途中でふたたび地震があり、元の延祐年間、第二回目の地震以後に再建されたこと、および七千四檻（間）の広さがあったことなどが記されている。そのほか清代の「重修東嶽廟記」「重粧碑記」など多くの碑刻がある。

行宮大殿の基檀の四方の隅の上に刻された親子の獅子像は元代のものである。また右隅の大鐘は明の嘉靖六年（一五二七）に鋳造されたもので八つの音色が出るので「八音鐘」と呼ばれている。

行宮大殿の背後にある建物は後土祠であり、「寝宮」と書かれた扁額があり、清代の塑像が祀られていた。

その背後にあるのが昌衍宮で、中には三人の娘々と六人の従者がいた。昌衍宮を出ると、いよいよ前部の天堂楼から陰曹府（地獄）に入ることになる。まず地獄に入るには地獄隧道の階段を下らなければならない。この陰曹地府は、明代に造られた泥塑の殿堂である。大小、百四十余の塑像がところせましとばかりに並べられている。その形態が迫真性をもつのと、規模が大きく、その内容が豊富なため、中国でもまれにしか見られない塑像の群集であるといえる。

この地獄府は上下二層に分かれており、上層は陰曹、下は地府である。上院には地獄祠、観音堂、面然堂、東曹、

西曹から成り、それは地獄の首府と査問機関とがある。陰曹のところで裁かれて地獄に堕ちた者は下層の地府に行く仕組みになっている。

地獄隧道を下ると、すぐ右側にあるのが東曹で三人の判官によって亡者が裁かれている。判官の前には不安におののいた表情の亡者が坐っている。東曹の反対側にあるのが西曹で同じく三人の判官の前には亡者が坐っているのは東曹と同じである。ただし、室の右隅には岳飛と岳雲が、秦檜夫婦を裁いている像があるのはユーモラスである。判官は生死簿と呼ばれる罪名を記した帳面を手に持っている。

東曹と西曹のあいだにあるのが観音堂と地蔵殿と面然堂である。観音堂には観音大士と二人の侍者が、地蔵殿では地蔵菩薩が中央に、左右には六人の侍者が、また面然堂には面然大士と二人の侍者がそれぞれついていた。功徳の時に用いられる面然大士は鬼のような顔をしているのが普通であるが、この堂の面然大士は普通の菩薩のような姿であった。

これらの陰曹府から地獄がある地府に下りるには十八段の階段を下らなければならない。仏教では十八地獄があり、十八難をそれぞれの地獄で受けなければならないと説くので、この階段の数も十八あるのである。

地府は五嶽殿と十王府から成り立っている。五岳殿の中央には東岳大帝、左右には西岳、南岳、北岳、中岳の等身大の諸大帝が祀られている。東岳大帝が人間の生死禍福、輪廻転生を主管しているのである。

左右の十殿では地府の十王を奉じ、その前には因果応報の教えを具象化したさまざまな塑像がある。人間が生存中に善を行っていれば、死後は真っ直ぐに天堂に行くが、生前に悪事を行った者は、死後、地獄に入って刑を受けなければならない。亡魂が地獄の門に入ると、秦広王、楚江王、宋帝王、五官王、閻羅王、卞城王、泰山王、都市王、平等王、転輪王などの十王が刑を定め、懲罰を加える。その後、六道を輪廻するのである。

十王の前では鬼卒が怖しい刑具を用いて罪人に刑を加えている。刑罰には、寒冰にさらす、剣の山、皮を剝ぐ、鋸りびき、眼をえぐる、油鍋でにる、火盤の上にのせてあぶるなど、さまざまな刑の執行が迫真性をもって造形化され、見る者をして恐怖心を起こさしめるようになっている。

地獄に堕ちた人の中でも、生前、善行為を行った者は、第八府の都市王の府において、金銀橋を渡り、望郷台へ登ることができる。望郷台へ登れば、友人や家族の姿を見ることができるのである。

第十府の転輪王の府では、輪廻転生を定めるところであり、つぎは人間に生まれるか、畜生に生まれるか、などを定められる。左の壁には六道輪廻図が描かれているその下の門扇には一人の女性の姿が見える。それは頚から下は人間の姿であるが、顔は驢馬になっている。半分は人間、半分は驢馬ということである。その門の中に完全に入ってしまうと人間から驢馬になることを意味する。

この地府を見ていると、地獄の諸相を塑像によって具象化したところに大きな意味があり、それらの塑像は当時の風俗、生活、刑法などの諸要素を見事にあらわしたもので、中国の当時の歴史や風俗の研究に貢献することができる。

六　隰県

小西天

小西天は山西省隰県の西北一キロの鳳凰山の山頂にある。もとの名は千仏庵といったが、明の崇禎七年（一六三四）、東明禅師が創建したと伝える。現在まですでに三四〇年余りの歴史がある。小西天の重門の題額には「道入西天」とあり、道は西天に入るという意味の字がかかれている。また隰県城の南には規模の大きな明代の仏寺で、大西天と呼ばれる寺があるため、この鳳凰山にある寺は大西天に対してそれと区別するために小西天と呼ばれるのである。

小西天に行くために県城を出ると、小西天の山々が見える。その山は鳥の翼のようで県城をめぐって山々が続き、かたわらには渓流が流れている。山の形は奇怪であり、あたかも鳥が飛んでいるかのように生き生きと躍動し、翼をひろげているかのようである。田園を通りすぎ、近くの昕水を渡ると、まず山の上にある天池のような池に山が映っている。小西天は山頂に雄大に位置を占め、その風格は非凡である。通天橋を渡ってから十段の階段を上り、洞天を通り抜けて、「道入西天」と書かれた天門をすすむと、迷宮、すなわち一般には西方聖境といわれるところにたどりつくことができる。

名勝古迹には往往に、人の心を動かすような伝説が伴っ

ているものである。伝説によると、遠い古い時代に幸せを求める一対の鳳凰が二羽で遊んでいた。ある日このあたりを飛んでいると、あまりにも美しい山水に迷わされて、さらに飛び回って風景を観賞していた。その中の一羽が景色にみとれて迷いこみ、山頂にぶつかって墜落し、鳳凰に似た山峰にかわったのである。孤桐峰の上にある観音閣の建物は鳳凰の頭にあたり、下院は鳳凰の背にあたり、谷川の両側の山はつばさを広げた鳳凰にあたっているという。大雄宝殿は山を背にして建てられ、東の端の摩雲閣とはるかに呼応しあっているため、摩雲閣は鳳凰の尾と普通呼ばれている。三つの建築群はそれぞれ一つずつ体系をなしているが、また渾然として一体となっているようにも見える。遠くからみると頭を低くした鳳凰が下を見ているようにみえる。

下院は小西天の中心である。無量殿は西から東へ向かって建ち、その中には数十体の銅仏像と、木雕の天宮楼閣がある。この無量殿の中に入ると、参拝者がいっぱいである。線香をあげて五体投地の礼をしている。数十体の仏像は色あせているが、重々しい感じがする。また天井から吊られたように造られた木雕の天宮や楼閣は目を奪うばかりに絢爛としている。その構造は細部にわたってよく造られており、あたかも極楽世界に入ったかのようである。

この無量殿では、僧侶による読経が行われる。儀式の時には、僧侶が並んで読経し、外では信者が線香を手にもって祈るのである。

無量殿と相対しているのが韋陀殿である。韋陀殿のなかには一本の楠の木で彫られた韋陀像が真に迫る堂々とした威力をもって立っている。

下院の南北には三つの僧舎がある。南の房舎は客殿であり、北の房舎には大蔵経が収納されている。この小西天に収蔵された大蔵経は明版の善本であり、すべてで七千余巻ある。保存状況は大へんによい。もしこの大蔵経を全部拡げるならば、二七〇里（中国の里）余りあるといわれる。

無量殿の上は大雄宝殿となっている。大雄宝殿の両側には文殊殿と普賢殿があい対して造られており、南北対象となって存在し、十分にその体裁を整えている。

大雄宝殿の中には大型の彩絵と、つるし塑像があり、これらのものが小西天の精華であるとされている。大殿の正

面には、五つの仏龕が連なり並んでいる。蓮台の上には薬師、弥陀、釈迦、毘盧仏と弥勒の諸仏が端坐している。その全身はきらきらと輝いている。顔はよく整い、姿態も悠々としている。蓮台の下の七宝蓮池の中の八功徳水はわずかに波立ち、舟や仙鶴がその間を游いでいる。南北の両側には十人の弟子の立像があり、ほんとうの人に大小があるように、その造形は生き生きとしてその精神を伝えている。ある者は剛健で美しく、ある者は表情が含蓄に富み、喜怒哀楽をあらわし、絶妙で真に迫り、その形をみるとその声が聞こえるようで、大きな声で叫べば動くように見える。

大雄宝殿の中は、彩色の懸塑と塑像で埋め尽くされている。北側の壁面には、三十三天の忉利天が造塑されており、仏の伝記の物語りや釈迦の前世の物語が彫塑されている。天宮の楼閣は巍々として、幾重にも重なりあい、紫竹華林が雲霧におおわれた見事な景観が彫塑されている。殿内の南側の障壁には、四大三聖と四大天王などの仏教の人物物語りが彫塑されている。絢爛華麗な梁や桁の間に懸けられた塑像は、いずれも美しく立派である。とくに八大金剛の塑像は威風堂々としている。三十三天の天宮の楼閣は、あたかも金銀瑠璃で造られ、珍珠、瑪瑙をちりばめたようである。それは、周りの塑像と相俟ってまさに極楽世界の情景をあらわしている。多くの人の顔をした飛天神鳥、孔雀、鸚鵡などは、その形が優美であり、姿態は生き生きとし、渺々たる雲の上を悠然として去来し、宮殿の前の欄干の台の上には十二人の伎楽の菩薩は音楽を奏しているところである。

大雄宝殿内の雕塑の人物は、その体型がそれぞれ違っており、体つきは異なっているが、一体の塑像ごとにそれぞれの性格がよく表れており、自然で生き生きとしているばかりでなく、生活の気配が濃厚に感じられる。人物が着ている衣服の線はなめらかでおもむきがあり、色彩は鮮明で大へんに強い感じがする。人体のバランスはよく、肌は豊満でなめらかであり、形は自然で生き生きと、動作も比較的調和がとれ、顔の表情も豊かに変化し生きているかの如く、心と形とを兼ねそなえているようである。

大雄宝殿の内部の全体の設計は、その配置がきちんと整い、このような膨大な雕塑の群が自然のままに配置され、数が多くても乱れることなく、繁雑であってもまじわるこ

とがない。

最も大きな造像は高さ三メートル余りあり、ちいさいものは手の掌におくことができる。調和のとり方は適切であり、きわだたせるために建築物を背景とし、古代芸術家の一気呵成になる仕事の気魄を感じさせる。

小西天の懸塑は明代の雕塑芸術の珍品である。普通の泥土が芸術家のすばらしい手を通して、このような豊富な色どりの芸術作品を造り出し、高度に熟練した芸術技巧をあらわしている。小西天の懸塑は芸術の宝であるとともに、泥塑芸術を研究する者にとっての宝ものであり、実物の資料でもある。

寺院の東端の孤桐峰の山頂には摩雲閣が造られ、その中には観音菩薩が、外には奎光文星が祀られている。摩雲閣の下には鐘楼と鼓楼とが南北に相い対して建っている。摩雲閣に登って遠く眺めると、堆景山には草木が茂り、田舎の家や田園が絵のようにひろがる美しいのどかな風景が人の目や心を喜ばせる。

七　稷山県

青竜寺

青竜寺は稷山県城の西四キロの馬村の西側にある。交通事故のため夕方晩く着いたので、あたりは夕闇に包まれていたが、多くの村人たちの出迎えを受けた。

この寺は唐の龍朔二年（六六二）の創建であるが、元明清代にわたって何回も重修された。現在の建物は元明代のものである。寺は前院と後院にわかれ大小八つの殿宇からできている。前院には天王殿、羅漢殿、地蔵殿などがあり、後院には大雄宝殿、腰殿、後殿などがある。

この青竜寺を有名にしているのは壁画である。腰殿と大殿に今なお壁画一八五・一三平方メートルが残っている。その内容は三教並存の絵画で、仏教では仏、菩薩、弟子、金剛力士、羅漢、供養人などが描かれている。道教では、南斗六星、五帝神衆、元君聖母衆、四海竜王などが、儒教では、文武の名臣、孝子、貞女、烈婦などである。明代の壁画としては大へんに珍しいものである。

八　運城県

関帝廟

解州の関帝廟は山西省運城県解州鎮にある。伝説によると、関羽の故郷は解州長平村であるといわれる。このため、ここには面積一万八千五百平方メートル余りの全国で最大の規模の関帝廟が修建されたのである。

関羽は字は雲長、三国時代の蜀漢の武将であった。幼少より不当に虐待されているものを助け、劉備と張飛の三人で桃園で義を結び五関において六将を斬るような、赫赫たる多くの戦功をたてた。紀元二一九年、関羽は孫権と曹操の両軍からはさみ攻めたてられて荆州を失い、兵は敗れて殺された。関羽の一生は忠義と勇猛をもって名をあらわし、死後には中武侯と諡（おくりな）された。宋代には追封されて武安王となり、明代にはまた協天大帝に加封された。昔は各地に関帝廟が建てられていた。

解州の関帝廟は隋初に創建され、宋の大中祥符七年（一〇一四）に再建され、明の嘉靖二十四年（一五四五）に地震で壊されて重建しさらに、清の康熙四十一年（一七〇二）火災で焼けてからまた重修し、十余年を経て、旧観に復興した。

この関帝廟は宮殿形式ににせて、建築を推進した。その気勢は宏大で壮観であり、その装飾は精緻にして華麗、その環境も古柏、桃林、百花が妍を競い清らかで美しい。

建物の配置は中国独特の中心線対称方式を採用した伝統的な形式である。端門から始まって、雉門、午門、御書楼、崇寧殿と春秋楼が順次に配列され、中心線上の両側には、石碑坊、木牌坊、鐘楼、鼓楼、刀楼、印楼、東西の配殿などが左右対称に整然と配置されている。

端門は三門ともいわれ、煉瓦造りの宮門であり、上には三つの入母屋造りの屋根があり、五組の斗栱がついているが、そのおもむきは端正で重厚である。

雉門は大門ともいわれるが、入母屋式の屋根の黄色い琉璃瓦が太陽に照らされてきらきらと輝き、精巧に造られた走獣や鴟尾も雄大で美しい。東側の文経門と西側の武経門とはこの雉門に連接している。雉門の後ろには演戯劇台があり、いつもここで関羽の平生の故事を題材とした芝居が演じられていた。

雉門から午門にかけての建物は、一九二〇年、もとの場所に元通りに再建されたもので、その建築は広壮であり、前後には精細に雕刻された石の欄干がある。午門の中にはもとは左側に周倉、右側に廖化の塑像があったが、破壊された後で現在は画像になっている。

午門の東西の両側には「大義参天」と書かれた木造の牌坊が一つずつあり、その重なりあった斗栱は壮観である。

午門を出て「山海鍾霊」と書かれた木の牌門を通りぬけると御書楼につく。御書楼のもとの名は八卦楼であり、清の乾隆二十七年（一七六二）康熙帝の御書の「義炳乾坤」と書かれた牌坊の横額を記念して御書楼と改められた。御書楼は甚だしくは高くないが、きわめて精巧華麗であり、重層入母屋造りのその建物は、周囲を回廊と石雕の欄干で囲まれている。

御書楼の北には碑亭と鐘亭とが東西相対して建っている。反り屋根の六角尖頭の碑亭の中には、清の雍正十二年（一七三四）、和碩果親が書いた石碑が立っている。鐘亭は清の嘉慶十四年（一八〇九）に建てられたもので、その中には清の順治十七年（一六六〇）に造られた大きな銅鐘があり、その鐘の文様は美しい。碑亭と鐘亭との間には二つの鉄でできた焚表塔があるが、この塔の基壇に力士像がありその姿は力にみちて生き生きとしている。

崇寧殿は関帝廟の中心となっている建物である。屋根は重層入母屋造りで周りには回廊が造られている。二十六本の石柱の上には蟠竜が雕刻されており、その竜身は湾曲し、その爪は力強く立っており、生き生きとした姿は想像力の産物である。崇寧殿の中には清の康熙帝が書いた「義炳乾坤」の額があり、その額の下には厳粛な関羽の塑像がある。殿の前にかけられた「万世人極」の額は、清の咸豊帝が、「神勇」の額は清の乾隆帝が書いたものである。ちなみに、この関羽を祀る崇寧殿の名は、北宋の崇寧三年（一一〇四）に徽宗が関羽を崇寧真君に封じたことに由来する。

崇寧殿の北には後宮がある。娘娘殿はすでに存在していないが、もとの場所は花園になっている。「気粛千秋」と書かれた木造の牌坊を通りぬけると、東西の両側に刀楼と印楼とが別々にある。

刀楼と印楼とは清の乾隆二十七年（一七六二）改築されたものであるが、二層、三檐の楼閣式の建築であり、その

周りには十二本の柱があり、廊下をめぐらしているが、その造りはきわめて精巧である。刀楼内には関羽が使っていた青竜偃月刀の複製した模型が置いてある。印楼の上には曹操が関羽を漢の寿亭侯に封じた印鑑の複製品がある。

麟経閣はまた春秋楼とも称せられているが、関帝廟のなかのもっとも高い建築であり、三〇メートルある。明代の万暦年間に建てましされており、清の同治九年（一八七〇）に再建されたものである。これは二階建て、三つの切妻をもつ入母屋造りの楼閣式の建築である。その閣内には階段がありそれを登ると、二階の暖閣の中に関羽が夜間、『春秋』を読んでいる塑像がある。関羽は体を横にして坐り、右手に巻物を持ち、左手で自慢の美髯に触れて眼光を集中させているが、その姿は真に迫っている。その上、机の上には燭台がおかれ、うすぐらい光線に照らされて、仏か真人のようにみえる。二階の回廊の木柱が階下に伸び出てつなぎ梁で支えられており、あたかも空中に浮いているように見える。これは中国の古代建築芸術の中の珍しい例である。この空にかけられたような廊下に立って欄干によりかかりながら外を眺めると、廟の中の景色がすべて眼底に焼きつけられるようである。

古柏が天にとどかんばかりに聳え、藤づるにおおわれ、殿堂、楼閣が輝く魚の鱗のように立ち並びその美しい景色と雄大な建築群は厳粛でさえある。

関帝廟の外側の大道の南側には結義園がある。解州の関帝廟は、山西省の重点文物保護単位の古代建築であり、修理と整理によって面目を一新させ、無数の内外の観光客をひきつけている。

九　晋城市

玉皇廟

晋城市東南十三キロ、府城村北崗上にある古代澤州における最大規模の道教廟である。全国重点文物保護単位。創建年代は不詳だが廟内に現存する碑刻に、

隋時居民聚之北阜、建廟宇三楹、内絵三清神像。

とあるので、隋代にはその原型があったらしい。北宋の熙寧九年（一〇七六）再建し、玉皇行宮と称したといわれる。金代の兵乱によって破壊されたが、元の至元元年（一三三五）ふたたび再建。元、明、清代にしばしば修復されたが、

建築の基本的なものは元の至元元年再建の時のものといわれる。現存する建造物で元代のものは二道山門だけである。頭道山門（総門）を入ると、二道山門が見える。山門の両側には鐘楼、鼓楼があり、階段の下の前庭には古柏がある。

玉皇廟の建物の配置は、中心線上に南から北に向かって、頭道山門、二道山門、成湯殿、献亭、玉皇殿の順序に並んでいる。東側には十三曜星殿、関帝殿、薬王殿、五道殿、六瘟殿が、西側には十二辰殿、二十八宿殿、高禖祠がある。成湯殿は献亭殿ともいわれ、中央の楼閣には商代第一代の帝王、成湯を祀っている。東は東岳殿で、その中に東岳大帝黄飛虎、および夫人の賈氏、子の黄天化、配下の大将、黄明、周紀、竜壊、呉謙などを祀っている。西の三王殿には牛王、馬祖、天銭冐神など怪異な造像が祀られている。これらの塑像は明清のものであるが、楼閣は元代のものである。

正殿の玉皇殿は、後院の正殿である。現存している梁柱や斗栱、神台上の浮彫などは宋金時代の建築の様式を伝えている。殿内には昔は一一八体の大小の塑像があったといわれるが、現在は五〇余体残っている。その塑像は玉皇大帝、宰輔、臣尉、仕女などである。このなかで多数を占める仕女の塑像は碑文に記載されている通り、宋金時代のものといわれる。

三元殿には三元すなわち、天官、地官、水官の三官の神像がある。この三官像は宋代のものであるが、歴代にわたって重修したため本来の姿はすでにない。

四聖殿には武将の装束をした四聖、すなわち天蓬、天猷、黒煞、眞極の神像が祀られている。この四将軍は紫微北極大帝の四将である。この四像は清代に重修されたものである。

后院の東にある十三曜星殿には十三星君の塑像がある。このなかの金星と水星は青年と女像であり、とくに水星はその姿も端麗で柔和である。同じく東にある関帝殿には名前の通り関帝が祀られている。西側にある十二辰殿には十二元辰君、すなわち子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥の十二地祇神が祀られている。同じく西側の二十八宿殿には二十八宿星君の神像がある。二十八宿と十二辰の彩塑はともに元代の塑像であり、元代の有名な雕塑家

の劉元の作品ではないかともいわれている。

中院の正殿である献亨殿は成湯殿ともいわれ、成湯（商代の第一代帝王）が祀られている。東岳殿には東岳大帝黄飛虎、夫人の賈氏、子供の黄天化や家臣の大将などが祀られている。東側の禁薬王殿には牢獄の神である禁王と、唐代の名医、孫思邈と扁鵲（あるいは華佗か）が祀られている。

中院の西側にあるのが高禖祠、俗称奶奶廟であり、子宝の神として人々に信仰されている。六瘟殿の立像は勧善大師、瘟道士およびその使者である。地蔵殿には地蔵王菩薩と十帝閻君が祀られている。

東西の碑廊には宋、金、元、明、清代の碑刻が三〇余りある。山西南部の道教史研究の重要な資料である。この玉皇廟にある多くの塑像や神像は見る者を圧倒する迫力がある。

青蓮寺

数千年の歴史と文化の累積がある山西省の沢州地区には、唐、宋、元、明代にかけて建造された多くの寺院、道観、神廟、仙祠が残っている。清の雍正十三年（一七三五）に書かれた『沢州府志』によると、沢州全域には三四六の寺院、道観、廟、神祠などがあり、そのうち半数以上が仏寺と道観であったという。

民間信仰の廟としては、農業神を祀った農壇、土地神や五穀神を祀った社稷壇、自然神を祀った風雲雷雨山川壇、猫虎、溝渠、昆虫諸神を祀った八腊壇などが各村々にあった。寺廟としては、城池の守護神を祀る城皇廟、孔子を祀った文廟、関帝廟、湯王廟、竜王廟、玉皇廟、東岳廟などが各県にあり、また歴史上の人物や土地伝説の神仙を祀った蒲相如廟、崔府君廟、二仙観や二仙廟、三忠廟、唐代の名医孫思邈を祀った孫真人廟などがあった。寺院の主なものには、現在の陵川県に唐代創建の北吉祥寺、南吉祥寺があり、高平県の定林寺も唐代創建、資聖寺は年代不詳だが明代に重建されている。同じく高平県の崇明寺（狼谷寺）は北宋、游仙寺も北宋の創建である。沁水に沿った陽城県の海会寺は唐代の創建、沁水県には晋代創建の聖天寺があり、丹水流域の晋城県には北魏創建の崇寿寺、そして北斉年間創建の古青蓮寺、唐代に建造された青蓮寺がある。

晋城市から東南一七キロの地点、硤石山の山腹に上下二

カ所に分かれた仏教寺院がある。すなわち上にある寺院が新青蓮寺であり、麓の丹水西岸に建っている寺院が古青蓮寺である。寺のある硤石山の山腹に立つと、東に樟の巨木が並ぶ崒山の山容が迫り、南には秀麗な珏山の二つの峰が望まれる。眼下には山裾をめぐって黄河の支流、丹水が蕩々と流れ、仰ぎ見ると硤石山の諸峰の断崖峭壁が目の前にある。寺の殿堂楼閣は鱗を重ねるがごとく櫛比し、境内には柏や銀杏の巨木が聳え、淮木の緑や野花が馥郁とした香を放って、あたかも深山幽邃の別天地に立つ感がある。北斉（五五〇－五七四）のとき、寺が創建されて以来、古代沢州の名勝地として名高く、現在、寺は全国重点文物保護単位になっている。

丹水に沿った山道は舗装もしてなく、道幅もせまく、山道から二・三百メートル下には丹水が巨岩をかんで流れているのが見える。車の運転を誤れば、たちまち丹水に落ちて絶対に助からない。

この山道の終点が広場になっており、その前は千尋の断崖である。赤茶けた切りたった巨大な岩石の上に屹立しているのが上青蓮寺なのである。谷の周りを通る道が上青蓮寺の山門へと通じていて、やがて上青蓮寺の山門の前に出る。

寺の前の平地には東西対称して二閣があり、西閣の門洞の両側には唐代の石獅子がある。この平地から南側に眼をやると、珏山の二つの峰が雲煙の中に聳え、その姿が脚下を流れる丹水の碧波に倒映している。この千年の古刹は屹立する峰々を背に、千変万化する雲霧の中にいらかを連ねている。平地の後方には両側に脇門のある山門兼天王殿、両側に三層の鐘楼と鼓楼があるが、山門、鐘鼓楼、東西の楼閣は、一九八六年に国家予算と寄附金二十万元を費やして復元されたものである。

山門の脇門から中に入ると、南北の中心線上に天王殿、蔵経閣、釈迦殿、大雄宝殿が並び、その両側には羅漢楼、地蔵楼、施房、僧房、十方堂などが廂を連ねている。東側の高台には、もと鐘楼、文昌閣、款月亭があり、また西側にも有斎堂、方丈院、祖師殿などの建物があったが、今は無い。西北の崖下には三仏殿があり、多くの建物が渾然一体と独特の寺の風格をつくっている。

蔵経閣は楼閣式の建築で、もと楼上に経を収め、楼下に

弥勒仏が祀ってあった。碑文の記載によると蔵経閣の創建は唐代の大和七年（八三三）で、宋代の崇寧年間（一一〇二―一一〇六）には、すでに多くの経典が貯蔵されていたことがわかる。金の大定（一一六一―一一八九）の初めに拡建され、五千巻にも及ぶ蔵経があった。元の至元二年（一三三六）の重修後、当時の僧主通秀は私財を投じて木製の経匣七百箇をつくり、その五千余巻の経を収めた。蔵経閣は寺院の図書館だが一般には未開放であり、その内容について知ることは難しい。明の嘉靖（一五二二―一五六六）と万暦（一五七三―一六二〇）年間に、寺では二回に亘り蔵経を調べた。二十世紀の三十年代に、これらの蔵経中の三十八巻の北宋『開宝蔵』を北京の展覧会に出品した際、二巻を紛失、残りの三十六巻の行方も不明になった。ところが一九八六年に高平県川西鎮新庄村で発見された経典が、青蓮寺の蔵経の一部分であることがわかった。それは『開宝蔵』二巻、『遼蔵』一巻で、その中の開宝四年（九七一）の銘記のある一巻は、中国に現存する九巻の『開宝蔵』の中で最も年紀の早いものである。

釈迦殿は宋代の建築様式が残る古朴雄壮な大殿である。創建は北宋元祐四年（一〇八九）であることが殿内の石柱と門楣の石刻題記で知ることができる。殿内には大仏壇があり、正面にある彩塑の仏像四体は宋代のものである。

羅漢楼、地蔵楼は、石柱題記によると創建は北宋の建中靖国元年（一一〇一）で、一部石柱と斗拱、梁栿などに宋代の建築様式を残しているが、そのほかは清代の重修である。羅漢楼には宋代の広目天と十六羅漢の彩塑像があり、地蔵楼の楼上には地蔵菩薩と十殿閻羅の彩塑像がある。宋代のもので明代に重修されている。羅漢楼の階下の後部の壁の中ほどに、北宋、政和八年（一一一八）の『羅漢碑記』がはめこまれていて十六羅漢と五百羅漢の名号が記されている。この中、五百羅漢の名号は中国現存記載中の最も早期のもので仏教史上重要な資料である。

境内には、その形から〝子抱母〟と呼ばれる高さ二十七メートルの古柏がある。枯死した母柏をしっかりと抱きかかえるように子柏が枝を繁らせている。この古柏の前に二株の大銀杏がある。雄樹は幹囲り五メートル、高さ二十五メートル、雌の樹も幹囲り四メートルの大樹で、毎年秋には百余斤の銀杏の実がとれるという。これらの巨木は寺の

古い歴史に一層の重みと神秘性を添えている。

寺外の東南角の石畳の高台に建つのが款月亭で、北は石壁に依り、南は懸崖にのぞみ、珏山を仰ぎ、丹水を俯瞰する。古来、毎年中秋の夜、墨客文人が参集し、楼に登り珏山の双峰にかかる山月を鑑賞したという。明、清代の地方志の中に「珏山吐月」として晋城四大景観の第一位に挙げられている。

款月亭のうしろに一つの天然の岩石があり「擲筆台」という。伝えるところでは、北周、隋初の高僧浄影寺慧遠が、ここで『涅槃経疏』を注し、注し終わって筆を空に擲げたというのでこの名がある。次のような明の王国光の詩がある。

高僧雲臥到蓮宮。
台土伝経写色空。
落筆山頭乗鶴去。
老松猶響雨蒼風。

上青蓮寺（上院）の山門の前から左に辿り階段を降りて行くと、下りの山道がある。その山道の途中から上青蓮寺を仰ぐと、まさしく断崖の寺という感じがする。大岩磐の上に屹立した寺院の風格は、地獄の入口のようなすさまじい感じを与える。この山道を下ったところにあり、丹渓（丹水）をすぐ下に見下す台地にあるのが下青蓮寺、すなわち下院なのである。

下院は古い歴史のある寺だが、隋唐時代の規模は知ることができない。清の乾隆十一年（一七四六）の重修碑によると、その当時なお、正殿九間、南殿九間、東西の禅堂五間の大殿堂が並ぶ雄壮な規模であったことがわかるが、現在はそれに比べると正殿は三間の大きさ、総面積は約六百平方メートルにすぎない。

正殿の殿内には低い方形の仏壇があり、花卉の図案が残存している。仏壇の表面は磚が敷きつめられ、高大な坐仏の弥勒仏、文殊・普賢の二菩薩、阿難、迦葉の二弟子、それに供養菩薩など六体の彩塑像が祀られている。これらの塑像はみな唐代の遺物である。正殿の建物には宋代の遺構や技法が残ってはいるが、補修、重修を重ね、すでに宋代建築の本来の面目は失われている。

南殿も間口三間の大きさで、彩塑像十二体が現存する。仏壇前面の五体が宋代のもので、他の七体は後世つくられ

たものである。殿内に唐、宋、金各一つずつの碑記があり、そのうちの唐碑が「硤石寺大隋遠法師遺跡記」であり、唐の宝暦元年（八二五）の鐫造である。碑首に線刻の仏殿図（弥勒菩薩講経図）が彫られており、典型的な唐代寺院の木造建築の様式が細かくわかり、古代建築史上の貴重な資料になっている。

下青蓮寺の東側に、明の万暦年間（一五七三―一六二〇）に建造されたチベット式舎利塔がある。これは晋城における唯一の蔵式仏塔である。西側には近年西面の石崖下の草むらから移した唐代の慧峰大師塔が建っている。

北斉の天保年間（五五〇―五五九）、浄影寺慧遠がここに庵を結び、道場を創立して、講経説法、経典の注疏を始めたのが寺の草創であり、初名を硤石寺といった。唐の代宗の在位時（七六二―七七九）には神墨禅師が修行のためここに住した。貞元年間（七八五―八〇六）に智通禅師がこの寺で著した『六波羅蜜疏』は世に流行し、大和初年（八二七）には、慧愔禅師が汾開（太原）からこの寺に来て、従来の基礎の上に殿宇を造営し、広く仏徒を集め、法華道場を開き、寺の規模を整えたのである。

唐の大和二年（八二八）、踵を接して名僧は集まり、仏徒は日増しに増えて、今までの古寺の規模と機能では需要発展に応じきれなくなり、今の上青蓮寺の位置に上院を創建し、普賢道場を兼設した。大和七年（八三三）、この地の六十七人の信徒の寄進で弥勒閣を建造、前後して田畑二十余項を開拓し、寺勢は日増しに隆盛となった。咸通八年（八六七）に青蓮寺の勅額を賜った。

百余年の後、北宋の太平興国三年（九七八）、上院に「福厳禅院」の名を賜り、下院を古青蓮寺として二寺分立した。福厳禅院は明代に再び青蓮寺に復し、それ以後、古青蓮寺、青蓮寺の寺名で今に至っている。

青蓮寺には多くの石刻資料がある。たとえば釈迦殿の前庭には五代の天祐十七年（九二三）建立の「仏頂尊勝陀羅尼経幢」三塔をはじめとして、「硤石山青蓮寺上方院銘記」や、北漢代（九五一―九七九）に建立された「邑碑」もある。邑碑には「天福七年歳次壬寅潤三月甲申朔五日」と建立の年代が書かれ、「院主省遐」、「邑頭龍鄯」などの名前があった。また「福厳浄影山場之記」も現存している。現在もなお「大宋崇寧四季歳次乙酉三月一日因下院浄影寺斎

会有仕持福潤」や「大隋開皇七季曇馥禅師之所立也」などの文字を明瞭に読みとることができる。そのほか「福厳禅院山場四至記」や「浄影寺山場四至記」なども現存しており、青蓮寺の上院と下院の当時の境域が明らかにされており、寺院経済史研究に重要な資料を提供している。

釈迦殿の内部の柱には「大宋元祐四年十月一日建造畢」という文字が刻され、宋の元祐四年（一〇八九）、現存の釈迦殿が建造されたことがわかる。

大雄宝殿は現在、破壊されてしまったが、そのあたりには、金の泰和年間（一二〇一－一二〇八）に建てられた石碑などがある。

款月亭には「重修歩月亭碑記」があり、ここが月見台であったことがわかる。

この度の調査でもっとも重要な発見は、下院の南殿にあった「大隋硤石寺遠法師遺跡碑」である。この碑首には「弥勒説法図」があるが、何といっても私が驚いたのは慧遠の遺跡碑の発見であった。この碑文を書写して下さったのは、調査に同行された中国社会科学院世界宗教研究所の丁明夷教授であった。丁明夷教授からは仏教文物の年代、石刻資料の解読など多くの学恩を蒙むることができた。以下、掲載する碑文は丁明夷教授の筆写したものである。

硤石寺大隋（ママ）遠法師遺跡

硤石巖、巖霊氣膺惟千載之寺。詳其志自北齊、周、隋」物接耳目、遠公之居以成其道、既修《涅槃》蔵疏絶筆」石顛擲上太虚、得以明真契、示其同。法師號稱慧遠」生燉煌李氏之族、家數世居霍秀里、本宅猶存。舊嫵與硤石西北連崗莩跗。前晋有匡山慧遠、南朝時論所宗、四百餘年至法師、占澤州、運當周氏革齊、并除」塔廟、異人大集、獨抗震遷之下、王辭無屈、面挹武帝、以阿鼻地獄不論貴濺、響非」幽證、其能及此、竟隠汲郡。大隋（ママ）受命、出詣上京。文帝始以曇延大師、詔公掌校譯涇行、僧中統理、耀臨一時、表立八人、立」衆清庄（ウ）。開皇十二年、没於京師浄影寺、是日輟朝」帝目喪吾國寶矣。験擲筆故處、舟流中貫、危石最峭」後之人實目日擲筆臺、邑里時朝禮之、想在容聲。有唐寶暦元年夏四月、傳學沙門紫羽、請刻石臺上。河」東薛重玄刋録故忘云。」

薛唐夫畫」
上官幹妻牛氏圓滿相」
寶花林」
施

これによると、慧遠がこの地に住し、道を成じ、『涅槃経疏』を執筆し終わって、筆を岩上から空中に擲げた。法師の号は慧遠、敦煌李氏の出身で霍秀里に家があった。霍秀里は青蓮寺から十余里行ったところである。旧址は硤石山の西北に連なる崗に接していた。東晋時代に匡山（廬山）慧遠がいたが、四百年余りたって論を宗とする地論宗の論師である慧遠が沢州（晋城）に住した。時代はまさに北周武帝が北斉においても廃仏を実施した時で、塔廟を廃滅しようとしていた。浄影寺慧遠はひとり、武帝に諫言して屈することがなかった。武帝が廃仏を強行するや、ついに汲郡（河南省汲県）に隠れた。隋が建国されると慧遠は勅命によって都に上京した。文帝は始め曇延を大師とし、校訳経行を掌らしめ、僧衆を統理させ、さらに八人を立てて、五衆主とした。開皇十二年（五九二）、京師の浄影寺で没したとき、帝は我国宝を失えりと言って哀悼の意を表した。

慧遠が筆を擲げた巨岩を後人は擲筆台と呼び、村人たちはこれを朝礼し、慧遠の姿や声を偲んだという。

唐の宝暦元年（八二五）四月、伝学沙門の紫羽が石台の上に刻し、河東の薛重玄が刊録し、薛唐夫がこれを書したというのが、この碑文の内容である。

ところで、『金石録補』巻十九に、本碑が収録されている。

唐峽石寺遠法師碑

右碑題云、大隨峽石寺遠公遺蹟、後云、寶歴元季四月沙門紫羽、請刻石臺上、河東薛重元刊録故志、薛唐夫書、按遠公亦名慧遠、爲燉煌李氏之族、歿于開皇十二季在京浄影寺、是日輟朝、高祖曰、喪我國寶矣、遠公修涅槃義疏絶筆、後人名爲絶筆臺、臺在峽石寺中。

これによると、遺蹟碑の最後の文が収録されていることがわかる。ただし擲筆台が絶筆台と称されたというのが異なっている。

十　高平県

開化寺

高平県城東北一七キロの舎利塔山にある。山深い寺へ行

くには道路が狭いのでジープに乗って寺の近くに行く。

五代の後唐時代に創建、宋、元、明、清の各代に修復された名刹である。寺の前に二階建の楼閣式山門がある。この寺の中心は大雄宝殿である。この本殿の左の柱に熙寧六年（一〇七三）の題記がある。そこには、

陳堰村維那　魏亶妻崔氏

施石柱壹條

と書かれていた。

この寺の旧名は清涼寺であったが、開化禅院と改称された。本殿は一〇六七年の創建であるが、壁画で有名である。その面積は八八、二平方メートルといわれる。壁画は北宋の紹聖三年（一〇九六）に描かれたもので、仏伝故事が描かれている。人物は迫真の筆力で書かれ、服装の色彩も鮮やかであるが、何分時代がたっているためその画像は鮮明ではない。

寺内には宋の大観四年（一一一〇年）の「澤州舎利山開化寺功徳碑」がある。山門（大悲閣とも呼ぶ）には「大唐舎利山禅師塔銘記并序」がある。なおこの寺の東南の山の中腹に唐代の舎利塔が現存している。このあたりまでどこから現れたのか不明であるが、たくさんの村人が私たちを見に集まってきた。

定林寺

この寺は高平県城東南五キロの大粮山に位置する。寺の側に定林泉があるため寺名となった。創建は唐代といわれる。山門、雷音殿、三仏殿、七仏殿などがある。雷音殿は後門の石刻に「元延佑四年四月二十日記」とある。殿の前の月台上に二つの石雕経幢がある。右の経幢には、

寺主僧恵鸞書経

幢大宋国雍熙七年陀羅尼

とある。左の経幢には、

太平興国六年定林寺置造

上生宝幢一尊

弥勒菩薩上生兜率天経

寺主僧恵鸞并書

と記してあった。この左の経幢は弥勒出生宝塔ともいわれている。

なお金代の石刻には、つぎのように書かれていた。

高平県定林寺重修
善法羅漢二堂
並郭公修功徳記

また金の大定二年（一一六二）に書かれた石刻にはつぎのように書かれている。

陵川県古賢谷禅林院
講成唯識論沙門釈□□聞悟
□□撰并書
後唐長興年中□□□□□□禅師
道能□□□□革故鼎新
住持四十余年度六弟子
於中□饒講金剛経□
至秦兼講百法論　足具其師資皆奇
特之士也
袁投僧善意出家得度

この定林寺は金代の法相宗研究の重要な資料を提供している。

地獄堂の壁画の荒廃は甚だしいが地獄変相図であることは明らかである。定林寺の文物は高平県文博館定林寺文物管理所に保管されている。

十一　長治市

観音堂

長治市西北小常郷梁家庄村東、長治市郊外の田園の中に位置する。明の万暦十五年（一五八二）に創建され、明代塑像のある寺院である。入口を入ると池があり、橋を渡ると山門がある。新しいものであるが斗栱部の模様に工夫をこらしている。山門を入ると右側に天王殿がある。その前の庭では、紙銭を燃やしていた。民衆の信仰が厚い寺らしく、天王殿その他の殿堂の柱の下にたくさんの線香が立てられていた。

天王殿の両側には鐘楼、鼓楼があるが中身はない。天王殿にも四天王像はない。観音殿だけが明代のもので、他は清代に造られた建物である。観音殿の前にも創建の碑文があり、その中に、明の万暦九年（一五八一）、農民が金を出してこの観音堂を創建したという。その中には、

大明山西潞南府長治県太平郷衡漳郡二里梁家庄村東創建

と記されている。

なお左側にも碑刻があり、この明の万暦十年（一五八二）の碑刻には、観音堂と塑像を造った木匠、泥水匠、石匠などの氏名が記されている。

観音堂には新しい聯であるが、右聯には「紫竹林中観自在」左聯には「白蓮台上現如来」と書かれていた。観音堂に入ると、堂内一杯の明代塑像に圧倒される。前壁、左右の壁、天井のすべてが塑像で覆われている。

中央には、観音を中心として左に文殊、右に普賢が配されている。観音は吼という名の動物の上に乗っている。観音の左には合掌した善財童子が立っている。観音菩薩の上の花蓋の上部には、釈迦を中心として左に老子、右に孔子の像が配された三教合一像がある。明代における三教融合を示すものである。陝西省藍田県の水陸庵にも三教融合像がある。

天井には天宮楼閣がある。宮殿式楼閣は華麗を極めたものである。その下には過去七仏が両側に並んでいる。

左右の壁の第一層には十八羅漢、第二層には二十四諸天、第三層には十二円覚菩薩が配されている。その上には竜に乗った仏があり、花蓋の下にはたくさんの菩薩や供養人の小さな塑像がある。十八羅漢を始め、それぞれの塑像は生き生きとした躍動感に溢れている。

この観音堂の塑像は、明の彩色塑像としては上の部に属するといわれるが、これによって当時の民間の彩色芸術の水準を知ることができる。現在、観音堂の塑像は省級文物保護単位に指定されている。

十二　長治県

洪福寺

長治県城南、李坊村にある。北宋の太平興国五年（九八〇）の創建、元の至正九年（一三四九）重修、明の天啓年間（一六二一―二七）、絵画、仏像が重修され、清の乾隆年間（一七三六―九五）には修復が行われた。寺院の配置は山門、天王殿、眼光菩薩殿、羅漢殿、大仏殿と中心線上にあり、両側には配殿、僧房、禅院、方丈院などがある。この中で眼光菩薩殿と羅漢殿は宋金の遺構といわれている。

眼光菩薩殿は円覚殿ともいわれ、十二体の円覚菩薩が配されているが、これは山西省では唯一のものであり、重要

な文物資料である。なお寺内には「円覚殿創記」「慈林山法興寺新修聖像記」などがあり、後者には、

政和元年六月十五日

山主賜紫僧紹円恵隆恵仙恵心

などと記されていた。なお現在の法興寺は旧地より現在地に保存のため移転させたものである。

十三　沁県

南涅水石刻館

中国の山西省にある仏教の名勝地といえば、まず第一に五台山があげられるのは当然であるし、また、北魏の造像が多く見られる石窟といえば、中国三大石窟の一つ、雲岡石窟であり、北斉の造像といえば、天竜山石窟をあげることができる。しかし、山西省には仏教文化財が数多くあり、石刻像についていえば、南涅水石刻館は仏像と石刻研究の宝庫なのである。

山西省と河北省の境から河南省の北部にまたがる太行山脈の麓にある長治市は、殷墟や安陽石窟で有名な安陽市と太行山脈を隔ててむかいあっている。近代的な地方都市として高層建築がつらなる長治市をあとにして省都太原へと向かう公路を進むと、やがて道路の左側に漳澤水庫という大きなダムが見える。さらに濁漳河の支流に沿って北上すると、沁県に着く。沁県は秦の時代に県が置かれた、古くから栄えたところである。

この沁県の県城から北に三十キロ行ったところに南涅水村という村がある。一九五九年のことであった。この村の古寺の遺址の中から千点以上の仏像や石刻資料が出土したのである。この仏像や石刻資料を保存するため、沁県県城内の岡の上に博物館が建てられた。それが現在の南涅水石刻館である。趙樸初中国仏教協会会長の名筆になる扁額が掲げられた、新築されたばかりの石刻館には見学者の姿もなく、美しい豪華な大きな建物は、みぞれまじりの雪の下で静まりかえっていた。

この石刻館には、北魏から隋唐にかけての仏像や石刻や経幢が、時代別の陳列室にたくさん飾られていた。もっとも古いのは、北魏の永平三年（五一〇）の題記のある石刻であるが、題記のないものには、それ以上に古いものもある。北魏室から各陳列室をまわったが、あまりに多い石塔、

石柱、仏像などの石刻資料に圧倒されてしまった。北朝仏教の石刻だけが、このようにたくさん整理されて陳列されている博物館は他にはないのではないか、と思われる。

塔の形をした石柱の四周には、いっぱい仏龕や仏像や花紋の装飾が彫られている。五十体に及ぶ大小さまざまな仏像の一つひとつを見るだけでも大へんな時間がかかる。大きな仏像は三メートル近くもあり、小さな仏像は三十センチぐらいであるが、それぞれの姿態や顔は異なっている。北魏の仏像は麦積山石窟などに見られる、いわゆる「秀骨清像」と呼ばれる優雅なやせ型の造型をしているし、北周のものや隋のそれは、その時代の様式を見事に表しているし、唐代のものは豊満華麗な唐の仏像の姿態を表している。まさしくこの陳列館は仏教芸術を学ぶ学習教室でもある。

中国仏教芸術史を専門とし、特に山西省の仏教文物については、どんな辺鄙なところにあるものも自らの目で観察し調査された中国社会科学院世界宗教研究所の丁明夷教授と同行したため、教授よりその一つひとつについて詳細な説明を受けたが、素人でもこの石刻館の学術上の価値の高さはわかるのである。

それにしても、沁県の南涅水村の古寺とは、どのような歴史をたどった古刹であったろうか。何故この地に価値ある古刹が建てられたのであろうかと、思いは仏教史の古い時代にはせていく。現在は名もない県にすぎないが、ここは古代の交通の要地であり、軍事的政治的に重要な場所であったと思われる。現在、この石刻館に行くには、太原市からかなりの距離があるので観光では行けないが、ゆっくりと時間をかけて学術調査に行かなければならないところである。